竹中さんが自慢げに見せてくれたのは、くぼさんがイラストを手がける「イオン化粧品」のカレンダー。この仕事は今年で7年目

プロップから“プロ”になったチャレンジド

プロップ・ステーションのセミナーで培ったスキルで、たくさんのチャレンジドが職を得、納税者となっている。イラストレーターのくぼりえさんもその1人。企業広告などのイラストを手がけるほか、2冊の絵本も出版している。“障がい者だから”ではなく、プロとして実力を認められて仕事を受けることがプロップのこだわりでもある。

腕は動かないが、指が動く。母親に手を移動してもらい、指先で細かな作業をする。爪には美しいジェルネイルが

部屋にはくぼさんの描いたカードがたくさん。心に留まった光景を、その場でスケッチする

くぼさんの作目の絵本『およぎたい ゆきだるま』。透明感のある色使いが楽しい

大阪府枚方市の自宅アトリエで。24時間介護が必要なくぼさんの傍らには、いつも母親がいる

で、世間のレールからはみ出していた。だから、絶対にレールに乗れない娘を授かったことで『これで私も、堂々とレールを踏み外せる』と。不遜な言い方やけど、解放されたような気がした。麻紀の視覚は光を認識する程度やし、今も私が母親であることをわかっていない。だけど、手を握り返してくれたり、はじけるような笑顔を見せてくれたりするようになった。ゆっくりやけど、確実に成長している。悠久の時を生きる娘と一緒やから、私も焦ることがなくなった。麻紀は私を変えてくれた恩師や」

チャレンジドを納税者にしたる！

娘が20歳のとき、離婚が成立。麻紀さんは国立病院に入院する。そして'91年、ボランティア活動で培った経験や人脈を生かし、チャレンジドの自立・就労を支援する「プロップ・ステーション」を立ち上げる。このとき、竹中さん42歳。

「日本の障がい者福祉は、チャレンジドを『保護すべき人たち』として福祉施策の対象としてきた。チャレンジド側も『社会から何をしてもらえるか』と受け身になり、障がい種別による組織間の確執も大きかった。私はそれを、すごく残念なことやと思ってました。それよりも、『自分が社会に対して何ができるか』を考えるほうが、素敵ちゃうかって。チャレンジドのなかには、社会を支える力にな